

茶路川筋の アイヌ語地名

第7回

○シュツナイ(シユウトナイ)

「シュツナイ」は、上茶路で茶路川に注いでいる川の名前で、「シユツスツ(ふもと)・ナイ(沢)」という意味があり、山のふもとにある沢のことを表しています。この沢を7^キほど奥へ行つたところには、白糠炭田最後のヤマ・上茶路炭鉱(1964年(昭和39年)開坑、1970年(昭和45年)閉山)がありました。



シュツナイ川と茶路川の交点

■「スツ」と「シツ」

この地名について、旧『白糠町史』は「老母が死んで葬つた沢」と訳しています。これは「スツ」を「老母」と解釈したことによるもので、白糠地名研究会は「バチエラー辞典では『老母』とあるので、(町史の)地名解はこれをとつたのであろう」と述べています。調べてみると、知里真志保博士や萱野茂氏の辞書でも「スツ」は「祖母」、「先祖」と載っています。

白糠地名研究会は「スツ」について、その地形から、刺牛地区にある「シツナイ」(シツ(尾根)・ナイ(沢)に通じるもの)として、「シツナイは、山と山にはさまれた狭い沢のことを言う。これをスツナイと解してもふもとの沢となる」と説明しています。同じ山あいの沢を表す地名でも、山の下を意味する「スツ」と山の

上を意味する「シツ」を使った言い方があるというわけです。

ちなみに、後志管内の留寿都(ル・スツ)村も「スツ」を「ふもと」として「道が山のふもとにある」と訳しています。

(参考)『知里真志保著作集 別巻Ⅱ分類アイヌ語辞典 人間編』、『萱野茂のアイヌ語辞典』)

○カムイチカップヌサウシナイ

「カムイチカップヌサウシナイ」は、国道392号からシュツナイへ向かう道道が分岐しているところの少し北のあたりと言われています。明確な位置は不明ですが「カムイ(神)・チカップ(鳥)・ヌサ(祭壇)・ウシ(いづもある)・ナイ(沢)」という意味から、アイヌの人たちが神に祈りをささげる大切な場所であったことがわかります。

フクロウをはじめ、ワシやタカは、カムイチカップ(神の鳥)であり、中でも最高位のシマフクロウは「コタンコロカムイ(村を司る神)」としてアイヌの人たちに敬われています。

○イマコタン

カムイチカップヌサウシナイの少し北に「イマコタン」がありま

す。「イマニツ(魚焼串)・コタン(村)」から、川をのぼる魚を焼いて食べた村と訳されています。

この場所は、縄文時代晩期から続縄文時代初頭(およそ3000年前から2500年前まで)の「上茶路遺跡」とほぼ同じところにあり、2006年(平成18年)に行われた発掘調査では、住居跡は発見されませんでした。緑ヶ岡式土器や石器のほか、76か所にもおよぶ焼土(たき火跡)が確認され、焼けたシカの骨が多く出土しています。

縄文の人たちがシカを焼いたたき火跡の上に、アイヌの人たちが魚を焼いて食べた村があったというのは、偶然とは思えない歴史のつながりを感じます。



発掘調査の出土品(公民館図書室の展示ケース)